

Editorial

突然の告知となりましたが、2014年の創刊以来5年間にわたって発行を続けてまいりました『Cancer Board Square』は今号をもって休刊となりました。読者の皆さまには、これまでのご愛読に感謝を申し上げます。また、突然の告知となり驚かせてしまったことを、おわび申し上げます。

*

少し創刊前夜のことをお話させてください。本誌創刊前、コンセプトと内容があらかた決まり、執筆ラインナップを模索しているなか、本誌の名前を本決定する時期が近づいてきました。当初はシンプルにプロジェクト名でもあった「Cancer Board」のままで、となんとなく思っていたのですが、専門用語とはいえ業界内では一般名詞化しているこの名前ではもろもろの障害があることがわかり、泣く泣く断念します。しかし、医療専門誌は最近こそ雑誌らしい名前がつくようになってきましたが、伝統的には即物性が前面に押し出されたものが多く、それが市場に受け入れられているという現状もあります（『胃と腸』と『罪と罰』の類似！）。

そういった業界事情だけでなく、文字通り本誌をプラットフォームとした多方向展開を目論んでいた当時は、奇をてらったような名前にはできないという思いも強くありました。発行期日が迫るなか、ロゴの発注やデザイン、書名登録など締め切りは容赦なく迫ってきます。そんな八方ふさがりにも近い状況で投げ出したくなっていたとき、取材先のとある病院の院内カフェで、連想ゲームのようにタイトル案をなんとなく交互に呟き始めました（相当追い込まれていたのだと思います）。どのくらいの時間で、何度目の案だったのか、またどちらが言ったのかも覚えていませんが、ぼろっとこぼれ落ちた『Square』に、それだ！ 天啓にうたれるとは、あのような時を言うのかもしれない……。 「Square=広場」と意味も字面も取ってつけたような言葉ですが、業界を見渡しても、未だみられない、なかなか冴えた誌名だと思っています。以来、それまでぼんやりとしか見えていなかった誌面イメージや内容、テーマがくっきりと輪郭をもち始め、坂道を転がるかのように創刊へといたり、今号まで続けてきました。

「がん診療のための新しいプラットフォーム」と銘打ったのは、本誌がこれまでのような特定の診療科を対象とした学術専門誌ではなく、職域、診療科をまたがり、「がん診療」という場

面に出会う可能性のある人々を全て対象にしたいという思いがありました。もちろん、そこには当事者である患者さんとその家族なども含んでいます。ここには戦略的にも、専門家向けの内容だけでは立ち行かなくなっている昨今の雑誌不況に対して、新たなモデルを立ち上げたいという目論見もありました。しかし、毎号できあがるたびにその難しさを突きつけられる5年間でもありました。

いみじくも、ゲノム医療が始まった昨今、欧米ではPatient Inclusiveが見過ごすことのできないものになってきているようです。治療方針の決定の場に同席するだけでなく、数々の臨床試験や医療機器開発の評価に患者側が参加することが必須の要件になってきました。中医師協では患者代表も参加していますが、よりミクロなレベルから、ごく当たり前の存在として医療スキームのなかに関われるのか。これは、端的にこれまでの医療者のスタイルやモデル自体もそのあり方が問われる世界になってきているのだと思います。そしてその萌芽は臨床現場とSNSを中心としたwebという両極で既に見られるようになっていて、と確信しています。

休刊最終号の編集方針もこれまでと変わりなく、徹底的に現場的であることに努めました。ハイリスクだったり、ガイドラインにunfitな患者が臨床のリアルと言われますが、それに対してどのようにエラーの視点から考えていくのか。「臨床知」とはいささか使い古された感もあるものですが、美しい言葉であり、そのエッセンスを凝縮することができたと思います。また、特別企画は「ジレンマ・メソッド」というオランダ発祥の臨床倫理カンファレンスの紹介記事です。特集と特別企画のどちらでも、ひとりの医療者が臨床で、患者さんと向き合うその場に寄り添うための知恵をまとめたつもりです。

休刊に臨み、お会いした読者の皆さま、創刊準備の頃から関わっていただいた先生、そしてデザイナー、印刷会社の方々の話を聞くにつれ、私たちが関わっていたこの雑誌の射程、潜在的な力をあらためて実感しました。読者の皆さまには、たった一冊の『Cancer Board Square』でも書架に取って置いていただけるならば、雑誌を作る者としてこれに勝る喜びはありません。

「Cancer Board Square」編集室 三橋・境田